

横井孝著『源氏物語の風景』

横井孝氏の待望の新著が公刊された。表題は『源氏物語の風景』。この八百頁を越える浩瀚な書をまとめるキーワードが表題に掲げる「風景」である。「風景」とは何だろうか。意味の射程がかなり広いことばという印象は否めない。もちろん、この必ずしも、共通認識を得ているとはいいいがたいチームについて、周到な横井氏が定義を怠るはずはない。本書の序を、まず「風景とはなにか」と始め、詳細にその内実を説き明かしている。そこで横井氏はまず歴史学の領域の「風景」の使用例を確認した上で（まず歴史学から始めるところに後述するような本書の学際的な姿勢があらわれている）、「風景」ということばを表題に含む高橋文二氏『風景と共感覚』、清水婦久子氏『源氏物語の風景と和歌』、小山利彦氏『源氏物語と皇権の風景』といった著作の中の

福 家 俊 幸

「風景」について言及し、それらとの相違を通して自らの立脚点を明らかにしている。以下、いささか長くなるが引用する。

しかし、本書は「風景」についての、特に前二者（評者注―高橋氏、清水氏の著作）の目指すような、こうした議論には参加するつもりはない。ひとつの景観の描写を織りなす表現が物語などの作品の構造と密接に関わり合うかどうかの判断は、とりあえず本書の庶幾するところではない。高橋がいうところの「王朝人の心がいかに自然を見、捉え、表現していったか」という視点を内部の表現にもとめるのではなく、作者にとつてごく自然に現前した歴史的時間あるいは空間という―現在の私たちの見失った（あるいは見失いかけている）―ものを、あ

たうかぎり復元し可視化する試みをしてみたいのである。したがって、対象となるのは「王朝人の心に深く関る特にその慰藉的・浄化的なありよう」に限定されるのではない。むしろ、私たちには、高橋がいう「単なる自然の景觀」すら見えていないのではないか。「単なる自然の景觀」もそう単純なものではないのではないのか、という反省に立つ試みである。いわば「保存修景」の模索とでも比喩できようか。したがって、「風景論」などという「論」をめざすものではない。もちろん、いま使ったばかりの「保存修景」という比喩にも拘泥したくない。用語ころがしに終始したくないのである。

ここに横井氏の姿勢が端的に示されている。本書は「作者にとつてごく自然に現前した歴史的時間あるいは空間という——現在の私たちの見失った（あるいは見失いかけている）——ものを、あたうかぎり復元し可視化する試み」であり、それは「保存修景」の模索とでも喩えられるものだという。そうした言説の中で「高橋のいう単なる風景すら見えていないのではないか」という横井氏の主張は、自らの立場とともに強い自負を示すものである。○×論、△△論というように表装を次々に取り替えて、命脈を保ってきた現代の平安文学研究への強烈なアンチテーゼであり、その前にやるべきことがあるのではないか（あったのではないか）

という至極まっとうなことが述べられているのである。さらにその姿勢は徹底していて、保存修景という比喩にも拘泥したくない、と述べ、そのパラグラフを「用語ころがしに終始したくないのである」と総括している。何気ないことばであるが、「用語ころがし」には先行研究に対する痛烈な皮肉が読み取れるだろう。本書はともすれば実態から遊離して観念的な方向に傾斜しがちであった平安文学研究に対して強い警告を発しているのであり、そうした先学との対峙の姿勢が本書を（著者の意図を越えて）スリリングなものとしているように思われる。

さらに本書の特質として、序の「風景」をめぐる言説の中で「風景」の先例がまず歴史学の成果の中で探られていたように、国文学の領域に留まらない、歴史学、考古学、心理学、気象学、造園学など他領域の広汎にして深い知見が援用されていることが挙げられる。横井氏の該博な知識と学問的ネットワークに驚嘆するほかないが、本書の議論が国文学という狭い領域に限定されるものではなく、他領域にも接続する、汎用性の高いものであることが裏付けられているよう。付け焼き刃ではない、真の意味での学際的研究がここに展開されているのであり、地に足の付いた確かな成果を我々は手にすることができるのである。

具体的な内容・成果について紹介することが、まさにこ

のような書の書評にこそ求められているだろう。しかし、この浩瀚な大著を紹介するのは、相応の紙幅を要する。書評の恒例ともいべき目次の紹介すら、少なからぬ紙幅を要するので、それすら省略するほかない。簡単に全体像について触れておくと、書名に『源氏物語の風景』とあるように、『源氏物語』論が中心であるが、『竹取物語』『伊勢物語』『紫式部日記』『紫式部集』『更級日記』『夜の寢覚』『狭衣物語』など枚挙に暇がない作品が論じられている。その基本的なスタンスは先にも述べたように、遠い過去に存在していた、あるいは仮象としても存在していた可能性があるものをいかに現前化するかという緻密な作業と考察だが、あわせてこの書を貫くのは、文学史への周到な目配りである。そもそも横井氏自身、『平家物語』などの中世文学への発言も旺盛であるように、たこつば的な閉鎖性とはほど遠い研究者である（現代の専門化が進む研究状況下で『源氏』と『平家』両作品に専門的論考が書ける人は他にほとんどいないのではあるまいか）。その強みが本書でもいかになく発揮され、例えば『竹取物語』を論じるにあたって、鎌倉時代の物語への影響から始める。その分析から『竹取物語』からの単線的な影響ではなく、『竹取』伝承群といったものからの複合的な影響を抽出する。そうした伝承群からの影響は『源氏物語』の桐壺更衣の造型にも影を落とす

ていたとする。新しい文学史の見取りであり（正確にいえば、横井氏は本書に先行する論考ですでにこの問題について説いているが）、数多い本書の新知見の中でも印象深い指摘である。

『伊勢物語』初段をめぐって、歴史学の成果を援用しながら、遷都後の平城京などの状況と物語本文との関係を説いた論考も興味深い視界を示している。このような他領域の新しい知見を貪欲に吸収する姿勢は他の論考にも共通し、教えられるところが多い。本書の中核をなす『源氏物語』でもさまざまな問題が遡上に載せられているが、まず着目したいのは、紫の上の登場場面での「十ばかりにやあらん」という年齢を導入とする「子ども」論である。そこで実際には十二歳であった紫の上を光源氏が誤認したのだとする説を批判しつつ、この時代の物語の年齢が持つ固有の概念を解き明かしている。『源氏』諸本の異同への煩を厭わない目配りや『源氏』以外の諸作品も含めた「ばかり」などの表現、十歳前後から十二歳に到る年齢をめぐる表現の用例の博搜によって、十歳という年齢に往時の人々が見ていた、過渡的、境界的な概念を丁寧に掲げ上げており説得力がある。

明石の入道が近衛の中将を捨てて播磨の守の官を得たことをめぐり、史実としての近衛の中將の任官・退官年齢を

表に示しつつ論じた論考も労作であり、確かな手応えを感じさせる。また歴史的事実として、左大将に比して後衛に押しやられた感のある右大将という官が『源氏物語』では逆に活躍する官となっていることをめぐる考察も、準拠論に新たな視界を示すものとして注目される。「あえて「右」を選択したことは、現実社会から一歩外れた所に物語のなかの住民たちを着地させたということになる」「……この物語の準拠を云々する際に、かならずぎりぎりのところで歴史的事実と齟齬ないしずれを見出すことである」「……現実社会を十二分に意識し反映しながらも、それを超克したり、重複したりするかたちで、現実との抵触を避けている」。このような視点は従来等閑にされていたものである。このような視点を言挙げすることに先行しがちな準拠論、ひいてはモデル論にも楔を打ち込み、『源氏物語』の準拠を「ずれ」という視点から位置づけ直す、極めて重要な指摘であると思われる。

『源氏物語』の六条院をめぐる言説も本書の大きな位置を占めている。ここでも作庭秘伝書との共通性や造園学の成果などを援用し、往時の人々の眼に映っていた六条院の威容を再現している。その一方で、六条院の四季の配置が巡回する時間構造から歪みが生じていて、それが光源氏の非理想性を表象しているという先行研究の指摘に対して、

「生半可な俗論の祖述にはかならない」と厳しく批判している。

紫式部の生きた時代は火災が多く発生し、そのため多くの建物が再建され造営された。この時代を歴史学者上島亨氏は「大規模造営時代」ということばで粹取つたが、横井氏はそのことと『源氏物語』との関係性を論じ、火災の記事が二例に過ぎないことを確認しつつ、この八の宮と女三の宮・薫の邸宅の焼亡と再建という二例がこの「大規模造営の時代」というフィルターを通してどのように見えてくるかを論じている。「大規模造営時代」の高揚たる時代の雰囲気の中で再建の手立てがなく宇治に渡らざるを得なかった八の宮に時代からの乖離を読むのは慧眼であろう。なぜ巨掠の池が宇治に通う薫を描写する中で書かれなかったのかを考究した論考からも、地理的考証と作品の読みとの幸福な関係が読み取れ、横井氏の面目躍如といったところである。作品に書かれざるものから、なぜそれが不在なのかを通して、作品の輪郭を明らかにするのは、火災や水害が書かれない意味を探った『紫式部日記』論とも共通し、固有の方法論となっている。それは先に見たような準拠がそのまま書かれなないことの意味を問うた論考とも通底して、横井氏の硬直化することのない、柔軟な思考法のあらわれであるといえるだろう。

横井氏の研究の中核を担ってきた『紫式部集』や『夜の寢覚』論を掲載していることも本書の価値を高めている。他にも『紫式部日記』の憂愁記述を『白氏文集』や紫式部周辺の沈淪詩との関係から「効用」という観点から位置づけ直すなど、日記文学研究にも重要な視点を供する論考が掲載されている。

総じて本書に収められた論考は緻密な考証に基づき、厳格な論証を重ねたものである。それゆえであろう、そのような手続きを欠いた空論というべきものには、厳しい批判が表明される。しかし、不思議と本書からは実証的研究にありがちな無味乾燥さや固苦しさは感じられない。それは本書が往時の人々の実感を大切にし、いわば古典作品を読む際の「キモ」とでもいうべきものを明らかにしているためだろう。例えば、物語に記述される邸宅が鮮明な画像を結びにくいことについて、屋内の女房からの視点はまず庭前に向かい、建物には向かわないというところから説き起こすなど、机上の論理とは違った、確かな手応えを伴った骨太で強靱な思考が本書に横溢している。このような本書は尽きることのない発想（ヒント）と知見の泉である。観念の中に自閉せず、作品を時代相の中に還元すること、豊穡な世界が広がることを目の当たりにできた。そのことが評者にとって喜びであり、後進としてありがたいことであ

あった。

本書を契機として、より学際的な議論が深まることが期待される。それだけ、本書が切り拓いた世界には、広がりがあり、普遍性がある。そのような共通の基盤、いわば学的プラットフォームが今ここに発信されたことを何よりも多としたいのである。旧来の研究を相対化し、新たな領域を拓いた書として、本書刊行の意義はまことに大きい。中でも、先述したように本書は発想の宝庫であるので、その学際的な姿勢も含めて、特に将来を担う若い研究者に一読を薦めたいと思う。

最後に、ここで取り上げた論考はいずれも評者の関心に拠るもので、取り上げなかった論も有益な新見に満ちている。すべての論に触れ得なかったことをお詫びしたい。

二〇一三年五月刊A5 806頁
16,000円（本体）武蔵野書院

（ふくや としゆき・早稲田大学教授）